The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「たしなみ」としてのアート
Author(s)	蓮, 行
Citation	Communication-Design 特別号. 2016, 1, p. 42-49
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55674
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「たしなみ」としてのアート

蓮行

KEYWORDS

演劇

アート教育

属人性

AUTHOR

蓮行 | Rengyou
アート部門　特任講師

劇団衛星という、非常に珍しいフリンジシアター（小劇場）演劇の専業集団を率い、京都を拠点に、全国で公演。社会的メッセージがあるようなないような作品群を、劇場のみならず、寺社仏閣・教会・廃工場等で上演する。また、演劇の社会教育力に着目し、未就学児から社会人まで幅広い人を対象に、多くの演劇ワークショップを手がける。

コミュニケーションデザイン・センターのアート部門が開講する科目の１つである「パフォーミングアーツの世界」のシラバスには、以下のように記されている。

■芸術は「たしなみ」です

芸術は限られた人だけの楽しみや、ストレス発散のためだけの道具ではありません。芸術は、現代社会にとって、なくてはならない社会的機能であり、その役割はさらに強くなっています。また、現代社会を生きる人々にとって、すぐれた芸術を享受することは当然の権利であると同時に、社会生活を営むための基礎的教養＝たしなみでもあります。

これはこの授業のそもそもの主担当であった平田オリザ教授（当時）の作文である。筆者は着任より４年間は、副担当としてこの授業と「文理融合創造ゼミナール」、「領域横断・演劇創作ゼミナール」の３科目を受け持ち、平田教授の東京藝大への転出により（それ以降は、平田は客員教授として授業を担当）、その後は主担当として、授業を受け持っている。上記の作文については、明快かつ強気な名文であるとの思いから、手を加えずにそのまま使用している。

筆者と平田は、共に小劇場演劇というジャンルの現役の職業演劇人であるという極めて特殊な立場（小劇場演劇における職業演劇人そのものが極めて少ない）で、大阪大学に常勤教員として奉職し、「アート部門」の講義を全学向けに出講してきた。私たちの教育上の最上位のミッションは、上記のシラバスの文言から「様々な専門の勉強をしている学生諸君に、『芸術』というたしなみを身につけさせる」ということであったと言える。

「たしなみ」とは何か

では、「たしなみ」とはどういう意味なのか？　デジタル大辞泉によれば

１．このみ。また、趣味や余技。

２．芸事などに関する心得。このみ。「多少は英語の―もある」

３．つつしみ。節度。「―を忘れる」

４．ふだんの心がけ。用意。「紳士の―」

とある。平田の文脈では、主に２と４を軸に、「芸術に関する心得を獲得し、またそれを普段の心がけとして心身に用意しておく」という解釈になろうか。

筆者などは、たしなみが過ぎたのか、大学は経済学部経営学科で４回落第し、留年し

て親からの仕送りがストップしてしまったので、そのまま在学中にプロの演出家・劇作家となった。しかし、大学８年生つまり「もう今年で卒業できなかったら放校だよ」という年限の年、親が「せっかく入った大学だから卒業した方がいい」と言い出して仕送りをしてくれることになり、仕事をセーブしてたくさんレポートを書いたので、なんとか卒業することができた。だから厳密には、筆者のプロの演劇人としてのキャリアには、大学８年生の１年間の空白がある。

筆者の両親は「サラリーマンと専業主婦」という、サザエさん的ちびまる子ちゃん的、もはや過去のものとなってしまった「高度成長期の標準モデル夫婦」であったが、家にはクラシックのレコード全集があり、母親はお茶や着付けを習ったりもしていて、少しは芸術への「たしなみ」を持っていたように思える。そのたしなみがあったからなのか、少なくとも「演劇なんかやめて堅い仕事に就け」と言われたことはなかったし（すでに定職には就けないだろうと諦めていたのかもしれない）、「演劇の社会的機能や効用」というような話にも、一定の理解を示してくれそうな気がする。気がする、というのは、そのような議論を親子でしたことがないからである。

まあ、うちの親に「たしなみ」があったから私の仕事に理解を示し、仕送りを再開してくれたとも考えられるが、ただ単に「せっかく学費と仕送りをつぎ込んだのに、無駄になってしまう…」という「サンクコストの罠（注1）」に陥っていただけかもしれない。まあ、両方の要因のハイブリッドなのだろう。

[写真]「パフォーミングアーツの世界」の授業の一こま。
演じるパフォーミングアーツはすべて学生同士の相談の中から生まれる。

科学と芸術の違いは何か

ものすごく話が逸れたので、戻そう。筆者は、科学（や工学、法学）はその「知」が「属人的」であることを良しとしない（『コミュニケーションデザイン』９号「安全演劇ワークショップの社会実装に関する議論」で、詳しく述べている）(*a) のだと理解している。

ただし「知」の出発点は、「属人的」なのである。「フィボナッチ数（フィボナッチより先に発見した人が居たらしいが）」、「小惑星イトカワ（発見者の名前ではないが）」、「ランゲルハンス島（海に浮かぶ島ではなく、膵臓の中の細胞群のことだが）」というように、その「知」が世に出るきっかけとなった人物の名が冠される「モノ」や「法則」や「公式」などが多数存在する。それは、その知をもたらした人物へのリスペクトが根底にはあるのだろうが、経済的利益の帰結先を明確にするという社会的な必要性もあるのだろう。個人的には、発見や発明をした人に過大な経済的利益（どのラインを越えたら過大か、は置いておく）がもたらされることは、好ましくないことであると考えている。

発見や発明が、ある１人の天才による「属人的な成果」であることは全面的に肯定し（剽窃は重罪である）、しかしその成果は、あまねく万人に理解でき、利用できるものでなくてはならない。これが私なりに理解する「科学」の態度（注2）である。

さらには、「科学」は、ある物理法則を明らかにする（そうすると、「そうだったのか！」とスッキリできる）であるとか、あるいは何かの課題を克服する（楽して早く移動したい、夏でも涼しく過ごしたい、など）といった、明確に「役に立つ」ことが意識されている（科学の態度の後者、つまり「役に立つ」ことがミッションとしてさらに強く位置付けられている学問は「工学」である）。

ただし、筆者が軸足を置く「芸術」のジャンルは、先述した「科学」の態度と共通する部分としない部分がある。共通する部分としては、やはりその作者の「属人的な成果」は、強く認められる。ソポクレスが書いたのか、シェイクスピアが書いたのか、時を超えて重視される。

一方、演奏や上演などは即時的なものであり、極めて属人的な能力を要するものであるが、時空を超えてその成果を継承することができない。つまりソポクレスの書いた「オイディプス王」の戯曲には継承性があるが、それを紀元前にどんな名優がどう演じたのかは、再現することができない。さらには、世に出された芸術作品は、それに触れた人々が基本的には個々で自律的に解釈する。ロダンの彫刻に涙する人も居れば、全く価値を感じない人も居る。もっと言えば、不愉快な思いをする人も居るかもしれない。芸術の価値は、その価値の享受側の属人性にも左右され、プラス～ゼロ～マイナスまでの幅が

ある。科学の価値には普遍性があり、基本的には解釈の余地はない。

「科学」と「芸術」の共通部分とそうでない部分を分類してまとめると、その価値の源泉が属人的な才能であることを認めるという点においては、共通していると言える。ただし、芸術の価値は、形式化して継承できる部分と形式化が原理的に不可能な部分があり、この不可能な部分については、「属人的な価値は認めるが、その価値が保存できない」という「科学」と異なる特徴がある。さらに、「科学」と「芸術」の大きな違いは、その価値の「享受」のされ方で、「科学」には属人的解釈が介在しないが、「芸術」には属人的な解釈が必ず介在する。

現代の日本の大学で創出される「知的果実」が、先述の「科学」的なものと「芸術」的なものと、どちらがより期待されているのか、議論の余地はないように思う。「誰が」発見したのか、「誰が」書いた論文なのかは強く重視されつつ、その知的な成果は広くあまねく理解されて役に立たなければならない、というのが大学の標準的な態度であろう。とすると、属人的な解釈の介在する「芸術」を大学に持ち込む意図は何であろうか？

説明しようと思えばいろいろとひねり出すことも可能なのだが、ここでは本稿のタイトルにもなっている「たしなみ」論をダメ押しする。

芸術の目的は何か

「芸術」の態度として、もう１つ重要なのは、「基本的に芸術には目的はない」ということである。「目的なし」とまで言い切るのが問題であれば、少しマイルドに「目的がない芸術は存在する」とか「目的がなくても芸術は存在できる」という言い方にしても良い。ロダンに「考える人、って作品、どういう目的で彫ったんですか？」と聞いたら、何と答えるだろうか、ということである。きちんと調べていないから何とも言えないが(美学の専門家に委ねたい)、「考える人」を彫った「目的」をロダン本人がどこかで言語化したものがあるかもしれない。だが、ここで問題にしているのは「本音」だ。「えーっと、スッポンポンの男の人が考え込んでる姿って、なんか肉々しくって良いよな〜、って思っちゃって…。うーん。彫った目的なんて言われてもなぁ…」くらいの本音だったのではないかと想像するのである。「作品創作の目的」などというものは、後からそれっぽいことをひねり出すことの方が多いのではないだろうか。少なくとも、現役の職業演劇人である筆者はそうである。作品を上演してから、「ああ、自分のこの作品で訴えたかった主題はコレだったのか…！」と気付くことも多い。つまりは「目的なく作ってみた作品だったが、後から思い返すと目的が発見された」ということである。

「目的がないのに、何で作品を作るのか」という所にピンと来ない方も居るかもしれないが、ノートになんとなく落書きするとか、風景を誰に見せようという意識もなく写真に収めるとか、そういう経験をお持ちの向きは多いだろう。「本人にもなぜだかわからないが、やってしまう」のが、芸術の根源的な態度だろうというのが筆者の考えである。演劇も、ほとんどの子どもが2歳にもならないうちに誰にも教えられなくても「ごっこ遊び」を始めることからもわかるように、無目的な内発的モチベーションからほぼ本能的にスタートする。目的なく行われるということは、言い換えれば芸術はそれそのものが「目的」的（誤記ではない）なのである。

なぜ、大学教育に芸術を？

筆者が、さっきから何を訴えたいのかと言えば、「なぜ、芸術家を目指すわけでもない総合大学の学生に、芸術をやらせるんですか？」という問いへの答えである。繰り返しになるが、理由はなんとでも説明はできる。なぜなら、芸術はツールとして用いれば、いろいろと「役に立つ」からである。教育的効果についても、初等教育から音楽も図工もやるように、その有用性はとっくに社会的な理解が得られている。それは大学教育においても、その有用性の説明はいろいろと可能ではあるし、「有用性を明らかにするアプローチ」で、様々な作文をあちこちに書いている。

だが、「ある有用性のために、ツールとして芸術を用いる」だけでは、本質を見失っている。オレンジの皮をマーマレードにして、実の部分を捨ててしまっているようである。

「何の原理も明らかにしない」、「何の役に立つのかわからない」、「すぐには役に立たない」、「つまるところ役に立つのかどうかもよくわからない」、けれど「やる」というのが、「本質も見失わないように気をつけて芸術を大学教育に導入する」態度であるというのが、筆者の考えである。「だから、何で芸術を…」という問いには、まさに「たしなみです」としか答えられない。

しかし、（この稿で述べたい文脈に照らすと）残念ながら、様々な芸術の中でもとりわけ「演劇」は、即物的・実利的な有用性が極めて高いジャンルに分類される。要は「手っ取り早く役に立つ」のである。表現力も、マネジメント力も、物事を俯瞰する力も、傾聴する力も、みんな高めてしまう。ついついおせっかい精神で「役に立つ」ことを伝授したくなる。が、なるべく雑駁に「演劇」という「芸術を用いた教育・学習ツール」を講義室に投下し、学生諸君が「勝手に」学んでくれるよう、もはや学びすらもすっ飛ば

して「やって」くれるよう、出しゃばらないようにしなくてはと日々自制している。

演劇のみに偏らず、アート全般を「本質を失わない形」で大学にインストールする仕事も忘れてはならない、と自戒している。

注釈

1）サンクコスト（sunk costs）の罠：サンクコストとは、すでに支出され、どのような意思決定をしても回収できない費用のこと。埋没費用。

[補説] それまでに費やした資金や労力、時間を惜しんで事業を継続すると、損失が拡大するおそれがあることから、意思決定に際して、サンクコストは無視するのが合理的とされる。（デジタル大辞泉）

「サンクコストの罠」とは、上記の解説にあるように、これまでの投資を惜しんで非合理な意思決定をしてしまうことを指す。

2）態度

1　物事に対したときに感じたり考えたりしたことが、言葉・表情・動作などに現れたもの。「落ち着いた―を見せる」「―がこわばる」

2　事に臨むときの構え方。その立場などに基づく心構えや身構え。「慎重な―を示す」「反対の―を貫く」「人生に対する―」

3　心理学で、ある特定の対象または状況に対する行動の準備状態。また、ある対象に対する感情的傾向。（デジタル大辞泉）

本稿では、2と3の意味合いで使用しており、「科学（全般をある種の擬人法で捉え）の構え方や、行動の準備状態」の意。

リンク先

*a)「安全演劇ワークショップの社会実装に関する議論」：
http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/bitstream/11094/25968/1/cdob_09_085.pdf